

## 緑爽会会報 No. 174

2021年6月25日発行  
日本山岳会 緑爽会  
発行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

～～《報告》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

### 緑爽会の活動状況について

代表 富澤 克禮

会員の皆様、なかなか収束の兆しが見えないコロナ禍の中、如何お過ごしでしょうか。ワクチン接種は、いかがでしょうか。この状況の下、予定どおり会報をお届け出来ることを嬉しく思います。

感染者数は、減少傾向ではありますが、下げ止まりの感があり、変異株の脅威がある中、政府は、6月17日に、沖縄を除き、緊急事態宣言を20日の期限で解除、7都道府県では「まん延防止等重点措置」に切り替え、適用期間を7月11日までとすることに決定しました。一方、オリンピックとパラリンピックは、開催に向け突き進んでおり、関心は観客数をどうするかに移っております。

今期に入っては、皆様ご存知のとおり、4月の総会は、集まることができず、書面での審議となりました。また、5月の「高尾山八十八大師巡りその2結願」、6月の「八重山～能岳」の両山行も残念ながら中止となってしまいました。

今後に予定しておりました、7月17日（土）の「暑気払い」についても、「まん延防止等重点措置」の期限が7月11日ですので、ルームの利用制限等々の諸般の事情や情勢を考慮しまして、誠に残念ですが中止といたします。

一方で、巻末の《予告など》の案内のとおり9月10日（金）に「さがみこベリーガーデン見学会とBBQ」を開催します。見学会の後、バーベキューで大いに楽しみ、語り合いたいと思います。

以下、山川陽一会員からの現地の案内をご紹介します。

『私は、一昨年息子勇一郎たちと（株）さがみこファームを起業し、相模原市の耕作放棄地を借りてソーラーシェアリング事業をはじめました。農地の上部で太陽光発電(272kw 一般家庭約80軒分)で電気をつくり、下部でブルーベリー(33種類1100本)を養液ポット栽培という方式で育成しています。ここで来春には会員制の観光農園SAGAMICO BERRY GARDENをオープンする予定です。農業など全く無縁な私でしたが、最近は連日の相模原通いで、いまや、すっかり農家のおっさんです。なお、開園にさきがけてプレ会員の募集を行っています。ご興味のある方は「さがみこファーム」でホームページを検索してみてください。（山川陽一）』

また前述の中止になった、5月の「高尾山八十八大師巡りその2結願」、6月の「八重山～能岳」については、周囲の状況、本部の指示等を見ながら、7月、8月に実施できれば…と考えております。実行の目処が立ちましたら具体案をお知らせすることと致します。その節は、奮ってご参加下さいますようお願い致します。

コロナ禍も、まだまだ、予断を許されない状況です、また、これから本格的な暑さに向かいますので、健康第一にお過ごし下さいますようお願い致します。

## 令和元年日本山岳会年次晚餐会のメインテーブル「富士山」

芳賀 孝郎

(本文略)

### 19316歩の山＜何故山に登るのか＞

瀬戸 英隆

今日はこのむずかしい問題を、この山行で答えを出そうと考えて登り始めたが、老齡から来る体力の減退で、下を見て早く頂上への思いだけが優先されている。いかんと思いつつも、つい、まあいい今日じゃなくてもと逃げに回る。更に気持ちの負担が重くなっていく。

思えば中学1年から山に登りだして、いくつかの挫折はあったものの、70年余りが過ぎた。

若い頃、雑誌でこれに関する問いがあり、すぐに投稿した。若き故にただ登る事の良さと楽しみだけを書いたが、何と掲載された。翌月号に早速反論が出た。M・J氏は言う。「山が総てか」と。反論の反論はとても弱いものだった。若い、若すぎたと思っている。

1/3くらい来てベンチのある所でひと休み。連休明けでハイカーはいないと思っていたが、ここには10名くらいが休んでいた。あまり人の多い所は好きではない。直ぐに立ち上がってまた歩きだした。後で考えれば、途中での休みは下山を含めてこの1回だけだった。回復した天気は良く晴れて太陽がまぶしいが、幸い森林が多く、あまり気にせず歩ける。

歩き出して1時間半、頂上到着。広い頂上には結構多くの人が散らばって座っていたが、間もなく登って来た30人を超す団体さんに占領されてしまった。いつもの握り飯を口に放り込んですぐ下山の途に就く。

そう、何故自分は山に登るのか？好きだからは当然だが、マロリーの言うように、“そこに山があるからだ”も何かしっくりしない。

毎回この問題にこだわって来ているが、きちんとした答えは出ない。いや出したくないのかもしれない。もっと何かが……。で、いつもと同じ結論が顔を出す。尊敬する岳人、大島亮吉氏の言、「山はわがところを占む。あたかも信仰のように」。それしかないな。

19316歩を要した丹沢前衛の山、弘法山。86歳5ヶ月の山行が終わった。

## 「木暮理太郎翁生誕之地」 碑に想う

小原 茂延

日本山岳会第三代会長である木暮理太郎は群馬県新田郡強戸村(現在の群馬県太田市寺井)に1873(明治6)年12月に生まれ、近代登山の先駆者の一人として広く知られている。

東京帝国大学の後輩であった田部重治と北アルプス、奥秩父に探検的登山を重ね、そのゆかりの地には記念碑が建てられ、木暮祭、田部祭など遺徳を偲んで現在も続いていることは登山記録のみならず、その人徳を慕われたことによるのであろう。

島田巽さんの「山稜の読書家」(1985 茗溪堂)の一篇に『二つの木暮碑』がある。奥秩父金峰山を望む金山平(1951 建立)にある広く知られた木暮碑に加え、新しく郷土の上州太田市寺井(1978 建立)に地元の強戸山岳会を中心として建てられ、その除幕式は11月3日快晴の下、強戸山岳会と地元の方々、日本山岳会の西堀榮三郎会長ら東京から折井、望月、成瀬、島田、野口、鶴岡、神谷、神原、野上、山崎の諸氏が参加(会報 402 号)している。秩父三波石の巨石に黒御影石がはめ込まれ、西堀会長の筆になる「山登りは先人の肩にのって先へ上へ進むものだ 木暮理太郎翁生誕之地」が刻まれている。このことを初めて知ったのは6年ほど前、緑爽会での南川金一さんの講演であった。当時調べてみたところ、この言葉はギリシャ神話にあり、過ちを犯して盲目となったオーリーオーンを憐れんだ鍛冶の神が、従僕であるケーダリオーン(一つ目の小人)をつけ、肩の上に乗せてその教えるままに東に導かせ、やがて太陽神に会い眼を癒したという伝説に端を発しており、かの万有引力の発見で知られるニュートンも先人の教えという教訓で引用している由である。松方三郎元会長が副会長時代の昭和34年に小集会で話されたのを撰文したものと考えられる。

さて、島田巽さんはこの記念碑の背面の碑文には著書「山の憶ひ出」の中の『秩父の奥山』の一節が引かれているが、「碑文は原文通りではないが」と記している。後年、横山厚夫氏も現地を訪ねて同様のことを書いている。

このことが気になって、かねがね現地を訪ねて実見に及びたいと願っていたが、コロナ禍もやや落ち着いた昨秋の一日、「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」の浅海事務局長のご厚意もあって蛇川河畔の木暮理太郎翁生誕之地碑にまみえることができた。確認できたことは、背面の碑文のスペースから前述の内容を納めるべく原文の一部を略していること、旧字などを読みやすく当用漢字に改めたことなどによるものと判明した。通常、表示する(中略)などを省略しているので「山の憶ひ

出」に親しんだ人達にはやや違和感を受けたものと思われる。

木暮理太郎が金峰山を評して「金峰山は実に立派な山だ、(中略)世に男の中の男を称えて裸百貫という諺があるが、金峰山も何処へ放り出しても百貫の貫録を具えた山の中の山である。」と書いているが、それは古武士然たる木暮理太郎翁とその生きざまに重なる。そこに歴代会長の中で最長の9年近く務めたゆるぎない人望と先見性を感じるのである。



## 編集者余話〈その2〉

南川 金一

私が『山岳』の編集に係わるようになったのは1991年からで、印刷業界は活版印刷から“脱鉛化”を遂げ、原稿をパソコンで入力し、その後の作業をコンピューターで処理し、オフセット印刷機で印刷する時代になっていた。しかし編集者側は、執筆者から手書きの原稿を受け、校閲・推敲など必要な事柄を赤で指示して印刷屋に回す、という従来どおりのやり方だった。最も気を配ったのは誤植である。誤植を避けるためにも原稿段階での校閲をしっかりやることである。新聞社や大きな出版社には校閲の専門部署があって、専任の社員と資料を備えているが、山岳会では編集者がやらなければならない。山の名前、高さ、人名、何よりも会員名・会員番号は故人を含めて正確でなければならない。小島烏水の「烏」が「鳥」にならないように、原稿の段階で欄外に「烏」と書いて「カラス」と添え書きをした。そんなことは校正時に直せばよいことであるが、初めから正しに越したことはない。追悼欄では、物故者の入会年・会員番号・紹介者を、事務室に保管してある入会申込書の綴りを見せてもらって再確認した。図書紹介欄では、取り上げる書籍の書名・著者名・判型・出版社名を図書室で再確認した。したがって、前述のようにサブタイトルが落ちるなどというのは、編集者あるいは最終チェックをする者の注意力散漫だと、私の目には映る。

### 国費でパソコンを習得

そのうちにパソコンが普及してきて、ワープロやパソコンで入力してプリントした原稿が増えてきた。私自身は万年筆で原稿を書き、パソコンとは無縁だった。私は2000年が60歳定年の年だった。目標の「2000年以上の山にすべて登る」は佳境に入っていたので、「山三昧」を夢見て、60歳で退職した。ところが、失業保険を受けるために職安へ行くと、再就職の訓練のために、無料でパソコンの学校へ通わせるという。1か月の入門コースの後、さらに3か月のDTP（パソコンによる編集）講座を受けた。DTPをマスターできた訳ではないが、Macを購入して編集ソフトを入れた。その後の『山岳』編集や百年史編纂に役立ったばかりでなく、拙著『山頂渉猟』を編集することができた。思いもかけず、国費で勉強できたのである。授業料だけでも何十万円かに相当した。

余談ながら、DTPは魔法のようなものだった。編集ソフトを使えば、判型・段数・字数・行数・フォントの大きさを指定して、文章を流し込むと瞬時に頁が編集される。活版では写真を組み込むような誌面の編集は大変だったが、編集ソフトでは写真をどこに置こうがそれに応じて記事が流れる。私の山の本では、イラストのソフトを使って、スキャナでPDF化した5万図の画像上にルートやテント地点を書き込んで概念図を作った。ある山頂での写真は、上の片隅が指の影で黒くなっており、その1コマしか撮っていなかった。写真編集ソフトを使って、その影を消して掲載することができた。これも魔法のようだった。

それ以降は、できればフロッピーで原稿をもらい、手書きの原稿は校閲・推敲しながら私がパソコンで入力し、フロッピーで入稿するようにした。「印刷屋が原稿を入力」と前述したが、印刷屋はそのような仕事にはアルバイトを使う。向き・不向きに加えて、1字1円といった出来高払いから、仕事のレベルはピンからキリで、入力ミスや変換ミスが多く、それが結果として誤植の原因になりかねないのである。校正は編集者の仕事であり、ミスの責任は編集者に帰する。いつも集中力がみなぎっているという訳ではないし、私には、山に現<sup>うつ</sup>を抜かして集中力が散漫になるという病気がある。本業では何度手痛い目に遇ったか知れない。

最初の4年間は担当理事として、次の4年間は田辺寿担当理事の下、その次の4年間は高遠宏担当理事の下で『山岳』編集に係わった。その後の2年間は芳賀孝郎副会長が百年史と『山岳』を担当、さらにその後の2年間は平山善吉会長が直轄で百年史と『山岳』を担当し、その間も委員長として『山岳』の編集を続けたので、都合16年間『山岳』に係わった。

戦後の会で、最も長く『山岳』の編集に携わったのは望月さんで、期間は21年に亘っている。その間には勤務の都合で札幌への転勤があり、その時期も『山岳』に係わっていたというから驚きである。私は、望月さんに次いで長く係わったことになる。しかし、長く係わったことと、いい仕事ができただろうかは別である。

### いぶし銀のごとき編集者

その間に掲載された印象に残る記事の一つは、『山岳』第93年（1998年）に山田二郎氏を書いた「佐藤久一郎—山岳会への偉大な貢献」である。この号は田辺寿氏が担当理事の時だったが、記事は関塚さんによる企画である。編集者は黒子であり表面に現れることはないから、誌面からは関塚さんが係わったことは窺えない。佐藤久一郎氏（名誉会員）は1984年逝去した。しかし、なぜか『山岳』の追悼欄に追悼文が載らなかった。逝去してから10年以上も経っているとはいえ、「佐藤久一郎氏ほどの功績のある人が山岳会の記録に残らないのは…」と関塚さんが提案して、慶応山岳部の後輩にあたる山田二郎氏に執筆を依頼し、関塚さんが編集に当たった。文中では、生い立ち・経歴はもとより、クライマーとしての佐藤久一郎、キャラバン・シューズ、ウェストン・小島烏水・木暮理太郎らのレリーフ、山研の扉や会の入口にあった看板の作成など、山の世界および山岳会として忘れてはならない話が盛り込まれて、佐藤久一郎氏を偲び顕彰する好企画となった。機関紙・誌には、記録にとどめておくべき事柄を記録して後世に残すという役割がある。記録漏れがあったら、それをどうカバーするか。それを考えるのも編集者の仕事である。関塚さんに、いぶし銀のごとき編集者を見る思いがした。

私が最初から最後まで担当したのは追悼欄だった。追悼欄を編集するにあたっては望月さんの考え方を踏襲した。望月さんが編集していた頃は、草創期の会員が次々と亡くなる時期だったので、古い会員をできるだけ追悼欄に掲載して、会の記録にとどめておくべきだという考え方だった。執筆者が見つからないときは、遺族に経歴の提供を求めて、まったく面識のない会員の追悼文を書いた。それが、後々に山岳会史を調べるに際し、大いに役立った。追悼文は単に故人を偲ぶだけでなく、山岳会史の重要な資料であり、そのように書くべきであることを教えられた。また、追悼欄に取り上げるに際し、会への貢献を重視した。貢献というのは、役員をやったというだけでなく、無名であっても永く会費を払い続けて会を支えてくれたこと、あるいは個性的な山登りへの評価を忘れなかった。また、社会的に有名な会員であっても、「その人の山の生き様が語られるのは『山岳』の追悼欄だけだ」とも。それに倣って、私も有名・無名を問わず追悼欄に取り上げるようにした。追悼欄に掲載した物故者は276人にのぼる。

前号で述べたように、望月さんは私の山岳会入会時の紹介者だった。紹介者になってもらうにあたって、日本橋の会社の役員室に挨拶に伺ったのが初対面だった。山岳会で望月さんの薫陶を受けた会員は少なくないが、私はその最後の一人だったと思う。2002年に亡くなり、『山岳』第98年（2003年）の追悼欄に村木潤次郎・水野勉・横山厚夫の三方に追悼文を依頼し、詳しい年譜を入れた。銀行マンだった望月さんの山の生き様が語られるのは『山岳』の追悼欄以外にはなく、いくらかなりとも恩に報いることができれば、との思いからだった。

## 夏が来れば思い出す—尾瀬の歌とガイド試験

吉田 理一

2011(平成 23)年、尾瀬ガイド協会認定ガイドの試験に合格して尾瀬の自然ガイドを第二の人生としてスタートすることになった。尾瀬の花や山・自然保護運動の原点といわれる所以など尾瀬に関わるいろんな事柄を知識として吸収し、よりレベルの高い認定ガイドになることを目指して来た。

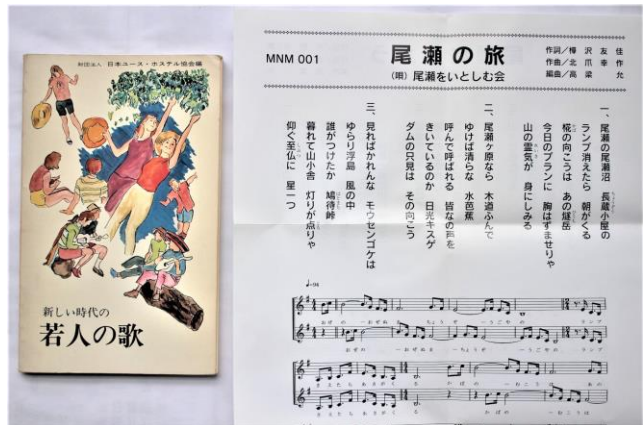
江間章子作詞、中田喜直作曲の「夏の思い出」はあまりに知られ過ぎている。若い頃ユースホステルのミーティングの際輪唱で教えていただいた覚えのある「尾瀬の尾瀬沼長蔵小屋のランプ消えれば朝が来る・・・」で始まる「尾瀬の旅」の曲が脳裏に蘇ってきた。

51 年前の 1970(昭和 45)年 4 月、22 才で就職した頃は「時間はあるが金は無し」だった。山に行きたくとも北アルプスなどとても行ける経済状況ではなかった。就職してすぐ自動車の運転免許は取得したが新卒者がマイカーを持てる時代ではなかった。私の住んでいる小出町(現魚沼市)は山に囲まれた魚沼産コシヒカリの産地である魚沼盆地の中にある。八海山大倉口登山道や越後駒ヶ岳駒の湯登山道までは自転車で行くことが出来る地の利があった。また只見線

の始発駅でもあったので小出駅発 5:30 会津若松行きの始発電車に乗るとヒメサユリの咲く浅草岳・守門岳は手軽な日帰りコースで年何回も出かけることが出来た。幸い車が無く懐具合が寂しくともその後、やれ 100 名山だ 200 名山だ 300 名山だなどと全国からツアー客登山者が訪れる事になる前で静かな山に手軽に行くことが出来た。

山行費用を出来るだけ安く抑えるため夜行列車や宿泊はユースホステルをよく利用した。当時はグルメ志向の旅行などという意識はまだ一般的には無かったのでユースホステル泊で十分満足であった。現在とは比較にならない程質素な旅であったが、旅する若者達は皆生き生きとして主体的に旅の計画を立て積極的に活動していた。当時のユースホステルの「誓いの言葉」に「私たちは簡素な旅行により未知の世界を訪ね見聞を広めよう」とあった。(一財)日本ユースホステル協会のデータによればユースホステル会員数は 1972 年がピークで 63 万人だったとの事である。私の就職した時代が活動の最も盛んな時期であったことになる。ユースホステルは一泊するごとに会員証にスタンプを押してもらえて、100 泊すると日本ユースホステル協会から記念バッジがもらえた。この 100 泊記念バッジをもらったときは嬉しかった。記念バッジも宿泊したユースホステルのスタンプが押された会員証も、青春の良き思い出として今も大切に机の中にしまっている。

当時のユースホステルでは、夜にミーティングと称した集いがあり、旅の情報交換やゲームをしたり歌ったり宿泊者同士が交歓する楽しいひと時があった。何処のユースホステルだったか思い出せないが、ミーティングで「尾瀬の旅」を輪唱して楽しかった懐かしい思い出がある。尾瀬ガイドをすることになってあの「尾瀬の旅」の正確な歌詞やメロディーを是非とも知りたくなった。インターネットや蔵書で調べているうちに、2011(平成 23)年に群馬県前橋市の「尾瀬をいとしむ会」が CD を 1000 枚作成したという上毛新聞の記事が見つかり、早速送っていただいた。また日本ユースホステル協会が 1971(昭和 46)年に発行して、蔵書として所有していた歌集「若人の歌」に歌詞と



「尾瀬の旅」の歌詞

楽譜も載っていることも分かった。さらにダークダックスがこの歌をレコーディングしていることも判明した。



ダークダックスのジャケット

森繁久彌作詞・作曲の「知床旅情」は加藤登紀子さんの歌唱で爆発的に全国的に広く歌われた。この曲は加藤さんの他にもいろんな方々が歌われた。ダークダックスが歌って1971年キングレコードから発売されたレコード「知床旅情」のB面に「尾瀬の旅」が収録されていることが分かった。インターネットの中古レコードの販売サイトにこのレコードがリストアップされていたので早速入手した。CDを聞きながら練習したが、尾瀬ツアーガイドでお客様の前で歌うまでには歌唱力が至らなかった。

私には尾瀬の歌に関して忘れられないエピソードがある。尾瀬ガイド協会認定ガイドの試験は一次筆記試験合格者に二次実技試験が課せられる。2011年7月埼玉県さいたま市で尾瀬の知識を問う筆記試験があった。一次試験合格者は9月に尾瀬の山小屋泊で一泊二日の実技による二次試験が課せられた。一日目は尾瀬沼周辺で、二日目は尾瀬ヶ原周辺で受験者をお客様に見立て、一人60分間のガイド実技をリレー形式で行う試験である。各々のガイド箇所は当日朝発表される。私に課せられたガイド箇所は、一日目は大江湿原入口からの60分間で、解説する内容は豊富にあり、ここは難なくガイド実技試験をクリア出来た。二日目のガイド担当箇所は段吉新道が割り当てられた。裏燧は尾瀬のメインストリートではなく、まして段吉新道は一般のハイカーは殆ど通らないルートである。

段吉新道は1937（昭和12）年、温泉小屋の星段吉が桧枝岐村から物資を運ぶために独力で切り開いた道である。どこまで行っても標高約1400mの平行移動であり、植生の変化は殆ど無い。当然である。それまでは御池から出発して三条の滝近くまでいったん下降した後、赤田代の温泉小屋まで登り返すのが御池⇄温泉小屋の物資運搬ルートで、大変な労苦を強いられていた。この苦労を少しでも軽減するため星段吉が標高差の少ない新道を開拓したのである。

このルート固有のテーマで60分間ガイドをするにはあまりにも話題が無さすぎる。そこで尾瀬に共通する話題を次から次へと出してガイドしていった。尾瀬の木道の話・第二長蔵小屋2階にある大石武一初代環境庁長官の色紙の話・蜂谷緑さんの「ミズバショウの花いつまでも」・平野長靖さんの「尾瀬に死す」・武田久吉博士の尾瀬の植物研究の話・長蔵小屋山女三羽鳥・尾瀬山小屋三代の記等の話題で時間を稼いだ。時計を見たら実技試験終了までまだ10分間もある、もう手持ちの話題は全部出し尽くし万策尽きた。

その時「夏が来れば思い出す・・・」のメロディーがひらめいた。NHKラジオ歌謡で昭和24年にこの曲を歌った歌手は何方でしょうか？クイズ形式で問いかけたが答えられる人はいなかった。第一ヒントです「数年前高齢で亡くなられた女性のシャンソン歌手です」と時間を稼いでいるうちに、私の実技試験終了地点である燧裏林道分岐点の標柱が見えてきた。「歌った歌手は石井好子さんです」とガイドして、最後は尾瀬の歌に救われて60分間の二日目のガイド実技試験は無事終了した。

## 滑志田 隆著「埋もれた波濤」

近藤 緑

著者と初めて会ったのは、彼がまだ20代で毎日新聞甲府支局の新人だった頃。夫(近藤信行)が勝沼に仕事場を持ってまもなくだった。仲介者はベストセラー『車窓の山旅・中央線から見える山』(1985年実業之日本社刊)を書いた山村正光さんだった。地方紙が圧倒的に強い任地で、全国紙支局の記者として東奔西走する苦労は察するに余りある。よろず面倒見のよい山村さんから得る風土・人脈の知識がどんなに心強かったことか。(と、私が勝手に思うだけで、本人の気持ちは解らない)。

ながく教育運動に関係していた私は、新聞社にも出入りすることが多かった。日教組も共産系・社会党系が拮抗していた時代。どこでもボスのベテラン記者を中心にした人の輪を感じたものだ。社会部記者としての滑志田さんは、職場の付き合いはあっても、群れるタイプではなかったようだ。

体格がよく、少年時代から野鳥を追いかけて山野を跋扈していた滑志田さんは、頼もしい若手だったろう。東京本社に戻った彼は、1986年11月21日の伊豆大島三原山の大噴火の際、全島民が避難した後の砂浜にテントを張って取材を続けたという武勇伝ももっている。

標題作『埋もれた波濤』は、本社に戻った著者が、先輩遊軍記者のサブとして大奮闘した物語。

「一九八三年八月三十一日、日本時間の午後十時、一機の旅客機がアラスカのアンカレッジ空港を離陸した。大韓航空(KAL)007便のボーイング747型機であった。同機は、ニューヨークから金浦国際航空に向かう乗員乗客二百六十九人を乗せていた。」(引用)この007便は、離陸すると指定航路を逸脱、領空侵犯とみなされてカムチャッカ半島上空でソ連空軍によるミサイル攻撃で撃墜された。日本人乗客28人を含む全員が死亡したこの事件をめぐって寝食忘れて取材したが、その成果は、米国、ソ連、それに日本、それぞれの国情から報道打ち切りとなる。その顛末を遺したスクラップ帖を手に、定年後の記者が現地を訪れるという話。ちなみに1987年、北朝鮮工作員による大韓航空機爆破未遂事件は大きく報道された。日本人を装った男女は爆破直前のアブダビで降り、発覚後、男は自殺したが女は捉えられた。余談になるが、仮の父と娘になりすました犯人の名が、私の旧姓と同じ「蜂谷」だったのが忘れられない。



今回取り上げた『埋もれた波濤』は、標題作のほか「鳩憑」「地図の中に吹く風」「迷鳥」の4編から成っている。いずれも著者の体験をもとにした作品である。ベランダに住み着いた鳩との葛藤や高校時代の教師の意外な変貌といった暮らしの中の哀歓を綴った作品もあるが、力作は「野鳥の会」創始者・中西悟堂(左写真)の生涯を訪ね歩く「迷鳥」だろう。私も自然保護運動の先駆者として知ってはいたが、この作品を読んだことで彼



あの夏、269人がサハリンの海に消えた。

1983年、北方の海上に消息を絶った大韓航空機。  
数多の無辜の命を奪ったのは、ソ連戦闘機が放ったミサイルだった――。

論創社

「埋もれた波濤」書影。下は帯。

の全貌を詳しく教えられた。

滑志田 隆さんは1951年生れ。早稲田大学政治経済学部卒。毎日新聞社入社。退社後は統計数理研究所、森林総合研究所等に関係している。日本野鳥の会、勿論日本山岳会々員でもある。すべての体験が小説になってこの一冊に凝縮されている。現役時代、山形支局長を務めた縁で同人誌「山形文学」同人になった。そのほか俳誌「杉」「西北の森」同人。定年後、これだけの趣味三昧に生きられる人があるだろうか。私は滑志田夫人の賢妻良母ぶりを思った。

新聞記者で文筆家と言えば、大先輩・島田 巽氏を思い出す。朝日新聞社から人事院の人事官になられた方だが、その島田さんの書いた論説を文豪・谷崎潤一郎が悪文とけなした。ゼントルマンの島田さんは「以来、『文章読本』をひもといている」と応じた。痛烈な皮肉と思った。谷崎はその中で文章の品格について、「饒舌を慎しむこと」をあげ、「あまりはつきりさせようとせぬこと」と書いている。新聞記者にとっては笑止千万だろうが、滑志田さんの文章は登場人物が多く、正確過ぎて読者には重たい気がするのだが・・・暴言多謝。

(論創社刊、本体 2000 円) ●この本のお求めは論創社 (☎03・3264・5254) または著者へ。

## 古道調査の現状 (情報提供) ②

日本山岳会創立120周年記念事業の一つ「全国山岳古道調査」は、3月末に各組織・会員からの推薦が締め切られ、4月から来年夏ごろにかけて山岳古道調査プロジェクトチームにより120の古道を選定・決定する予定になっています。緑爽会会報173号では、緑爽会としての取り組みへの方針とともに、緑爽会会員及び会員が所属する支部の推薦した古道と取り組み状況を一部紹介いたしました。前号で紹介した以外の推薦古道について、わかる範囲内でご紹介いたします(本部PTに推薦いただいた古道を記載していますが、すべてを網羅しているわけではありません)。

**北海道支部** 北海道遺産に選定されている「増毛山道」「濃昼(ごきびる)山道」、復元してフットパス化した「様似山道」「猿留山道」のほか、「殿様街道」「本願寺道路」の6つを推薦しています。

**秋田支部** かつては出羽と陸奥とを結ぶ交通の要衝だった「矢立峠」、重要な街道だった「秋田街道」「白木峠」、奥羽山脈越えの山道である「仙北街道」、古くは修験道だった『国指定史跡「鳥海山」道者道』のほか、「矢島街道」の6つを推薦しています。

**山形支部** 最上地方と庄内地方を結ぶ古道「与蔵峠越え」、置賜と庄内を結んでいた山岳道路「朝日軍道」、置賜から下越に通じる旧街道「越後米沢街道・十三峠」、古代から開かれ道者たちで賑わった「出羽の古道六十里越街道」、蔵王山の登拝路「蔵王参拝古道」を推薦。

**神奈川支部** 丹沢の行者道や修験ルートである「鐘ヶ岳の行者道・参拝路」「日向修験の行者道」「大山の行者道・参拝路(鎌倉時代～江戸時代)」「大山修験の行者道(江戸時代)」「八菅修験の行者道」のほか、「箱根旧街道」「湯坂路」「足柄古道」の8コースを推薦。

**山梨支部** 古代からの修験の路十筋で構成する「金峰山古道(御嶽道)」、人々の生活に根差した道でウェストン、アーネスト・サトウ、朝香宮ら南アルプス開拓に利用したが現在は埋もれている「南アルプス北部山岳古道」を推薦しています。

**信濃支部** 上高地への入山路として我が国の登山史上重要な道「徳本峠」、信州と飛州との交易路として開発され播磨上人の槍ヶ岳開山に貢献した「飛州新道(飛驒新道)」のほか、「善光寺

古道」「中房温泉大峠道」「権兵衛街道（権兵衛峠旧道）」の5コースを推薦しています。

**埼玉支部** 「秩父往還（雁坂峠越え）」「十文字峠越え」「三峯神社の表参道及び大陽寺への参詣道」「鎌倉古道上道のうち武蔵嵐山駅から笛吹峠を経て慈光寺、岩殿観音に至る古道と巡礼道」「奥武蔵古道を巡る里修験の峯入りみちと峠道」と「坂東九番・慈光寺への参詣道」を推薦しています。

**個人としての推薦** 会報前号で紹介しました吉田理一さん、中村好至恵さんのほか、五十嶋一晃さんが旧立山温泉からの「松尾峠道」「ザラ峠越え平（日本最初の有料道路）」「御歌新道（立山温泉～松平の湯～浄土山と国見岳のコル～室堂）」の3道と、薬師岳参拝道（有峰～小畑尾峠～真川～太郎兵衛平）を推薦しています。

来年の夏ごろにかけて、120の山岳古道が決まっていくこととなりますが、古道調査に関わる動きなどを会員の皆さんからお聞きするなどして、引き続きお知らせしていきたいと考えています。  
～～《予告など》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～  
7月暑気払い：冒頭に富澤代表が触れられているように中止と致しました。

**9月イベント**：9月10日（金）：山川会員の「さがみこベリーガーデン見学会とBBQ」

定員15名（先着順） 会費：3500円

集 合：JR 橋本駅改札口9時（京王相模線利用でも行けます）

その後一緒に行動。バスで三ヶ木に行き、現地まで徒歩約1時間です。

持ち物：通常の軽登山の服装。BBQはしますが軽めの昼食（お握りなど）と飲み物は持参ください。

担 当：富澤、山川、荒井

申 込：準備の都合もあり、8月31日（火）までに、下記へ申込み下さい。

富澤

荒井



**会費納入の依頼**：コロナ禍のため今年度も総会が開催出来ず、会費納入は振込でお願いいたします。

現在、今年度会費未納の方が17名おられます。つきましては会費（1500円）を、7月末日までに以下の要領にて、お振込みをお願い致します。

・ゆうちょ銀行からの振り込み 10000-18539041 「リョクソウカイ」

・他の金融機関からの振り込み 008-1853904 「リョクソウカイ」

※他の金融機関からの場合「支店名」は「ゼロゼロハチ」と入力してください。

**会員異動**（住所変更）：神崎忠男会員（6002）

#### --- 編集後記 ---

昨年、コロナ禍の中随分山へ行きました。今年は控えていましたが、5月末から3週連続で泊まりの山歩きをしたので、今後はワクチン接種に向け控えるつもりです。今号から小林敏博さんに会報編集を手伝っていただきました。きっちりされている方なので安心感があります。（荒井正人）

今回から会報編集に携わりました。慣れないことで大変でしたが、このような水面下の活動も会を支えていることを実感しました。今後ともご支援よろしくお願い致します。（小林敏博）

次号予告＜8月24日発行の主な内容＞皆様からの近況・投稿をお待ちしています。

南川さん「編集者余話〈その3〉」、古道調査の現状③」他